

東郷遺跡

- 江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う発掘調査報告書 -

2024年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



1 1区完掘（西から）



2 2区完掘（西から）

序

東郷遺跡が所在する日高郡日高川町は和歌山県中部に位置し、平成17年に旧川辺町、美山村、中津村が合併して発足しました。西は御坊市、日高郡日高町、北は有田郡広川町、有田川町、東は田辺市、南は日高郡印南町と接しています。県内第3位の面積を有しております、古くから果樹栽培や林業が盛んであり、特に備長炭の生産は日本一を誇っています。

東郷遺跡は日高川町と隣接市である御坊市の境界に位置する遺跡で、遺跡の大半は御坊市側に所在します。主に弥生時代の集落跡として知られた遺跡で、これまでの発掘調査によって弥生時代中期から古墳時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡、溝、土坑などの遺構が確認され、弥生土器や土師器、須恵器などの遺物が多数出土しています。

今回の調査は、江川小松原線通学路緊急対策事業に先立って発掘調査を実施したものであり、その成果をまとめ発掘調査報告書として刊行いたします。

本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

令和6年1月31日

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻井敏雄

例　　言

- 1 本書は和歌山県日高郡日高川町土生に所在する東郷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、江川小松原線通学路緊急対策事業に伴うもので、令和4・5年度に発掘調査を実施し、令和5年度に出土遺物整理を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受け和歌山県教育委員会指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は下記の通りである。

事務局長（管理課長兼務）	平林 照浩
埋蔵文化財課長	高橋 智也
発掘調査・出土遺物等整理業務	田之上 裕子、濱崎 範子
- 5 本書の編集・執筆、遺構及び遺物写真の撮影は田之上、濱崎が行った。
- 6 出土遺物整理に際し、下記の関係諸機関よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表す。
(氏名五十音順)
御坊市教育委員会・日高川町教育委員会
- 7 本事業の遂行にあたり、地元自治会、地域住民の方々から多大なご協力を頂いた。ここにあらためて感謝の意を表す。
- 8 出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査及び出土遺物等整理業務において作成した実測図やデジタルデータ、台帳及び写真等の記録資料は公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡　　例

- 1 遺構等の土層について記載した土色及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本彩色研究所監修『新版標準土色帖』(2016年版)に基づいて記録した。
- 2 発掘調査及び出土遺物等整理作業は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』(2006. 4)に準拠して行った。
- 3 調査ならびに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（平成14年国土交通省公告第9号）第VI系世界測地系のもので、値はm単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位(T.P+)の数値である。
- 4 調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲し、遺構番号は調査区に関係なく1からの通し番号である。
- 5 遺物実測図版の縮尺は、原則として1/4とし、土製品・鉄器類に関しては1/2とした。また、遺物写真の縮尺については特に統一していない。
- 6 調査で使用した調査コードは、「調査年度下2桁・市町村コード-遺跡番号」で以下の通りである。出土遺物・記録類はこの調査コードを用い、管理している。

22-28-041 (2022年度一日高川町(旧川辺町)・東郷遺跡)

目 次

本文目次

巻頭図版

序・例言・凡例

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境と歴史的環境	1
第2節 既往の調査	2
第2章 調査の経緯と経過	4
第1節 調査の経緯	4
第2節 発掘調査	4
1. 発掘調査	4
2. 現地公開	5
第3節 出土遺物等整理	5
1. 出土遺物応急整理	5
2. 出土遺物等整理	5
第3章 調査方法	6
第1節 地区割	6
第2節 調査現場の記録作業等	6
第4章 調査の成果	10
第1節 調査概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	12
第5章 まとめ	17

挿図目次

図1 東郷遺跡周辺の遺跡	2
図2 既往調査位置図	3
図3 地区割図	6
図4 遺構配置図	7・8
図5 基本層序	10
図6 1・2区土層断面図	11
図7 土坑実測図1	13
図8 土坑実測図2	14
図9 柱穴実測図	14
図10 下層確認トレント土層断面図	14
図11 溝実測図	15
図12 出土遺物	16

表目次

表 1	遺構一覧表	9
表 2	出土遺物観察表（土器・土製品）	18
表 3	出土遺物観察表（金属製品）	18

写真図版目次

写真図版 1	1	1 区調査前（東から）
	2	2 区調査前（北西から）
	3	32 土坑土層断面（北から）
写真図版 2	1	32 土坑周辺完掘状況（南西から）
	2	101 土坑土層断面（西から）
	3	102 土坑土層断面（東から）
写真図版 3	1	101・102 土坑完掘状況（北から）
	2	121 土坑土層断面（北から）
	3	121 土坑完掘状況（北西から）
写真図版 4	1	138 土坑土層断面（南西から）
	2	138 土坑完掘状況（西から）
	3	14 溝土層断面（南から）
写真図版 5	1	14 溝完掘状況（南から）
	2	139 溝土層断面（南から）
	3	139 溝完掘状況（西から）
写真図版 6	1	83・85 溝土層断面（北から）
	2	105 溝土層断面（南から）
	3	106 溝土層断面（南西から）
写真図版 7	1	105・106 溝完掘状況（北西から）
	2	49 柱穴土層断面（北西から）
	3	2 区下層確認トレンチ土層断面（南西から）
写真図版 8		出土遺物（1）
写真図版 9		出土遺物（2）

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境と歴史的環境（図1）

東郷遺跡が所在する日高郡日高川町は、和歌山県中央部にある日高平野と平野を流れる日高川の中～下流域に位置しており、平成17年に旧川辺町、美山村、中津村が合併して発足した。西は御坊市、日高郡日高町、北は有田郡広川町、有田川町、東は田辺市、南は日高郡印南町と接しており、331.59 km²という県内第3位の面積を有する。古くから果樹栽培や林業が盛んであり、特に備長炭の生産は日本一を誇る。

日高川町には東西に流れる日高川の浸食によって形成された河岸段丘が多くみられ、また日高川より北部は白馬山脈、南部は真妻山脈それぞれによって形成される山地が面積の大半を占める。東郷遺跡の付近は日高平野に属する沖積平野部であり、西に隣接する御坊市に所在する遺跡も併せて、周囲には多くの遺跡が所在することから古くから日高川を中心とした物流や人の活発な行き来を想定することができる。

東郷遺跡は御坊市と日高川町にまたがって位置する遺跡で、日高川の北岸にある微高地に立地し、遺跡の大半は御坊市に所在する。調査地周辺は、現状では北及び東に向かって上がる緩やかな傾斜地となっており、水田耕作地や住宅地が広がっている。

【旧石器時代】東郷遺跡周辺ではないが、日高川町内では松瀬遺跡から石核や剥片が出土している。

【縄文時代】東郷遺跡周辺では当該時期の遺跡は確認されていないが、日高川町内の遺跡として和佐遺跡、入野遺跡や石浦遺跡から縄文土器や石器が出土しており、御坊市では小松原I遺跡、小松原II遺跡が当該時期の遺跡として知られる。

【弥生時代】日高平野ではこれまで7個の銅鐸が出土しているが、東郷遺跡の周辺では(15)、亀山銅鐸出土地から扁平鉢式銅鐸3個、(24)、小松原II遺跡付近で外縁付鉢式銅鐸1個、5、鐘巻銅鐸出土地から突線鉢式銅鐸が1個出土している。また、周辺には弥生時代中期から後期とみられる高地性集落である(17)、亀山遺跡のほか、2、箱谷遺跡、(23)、小松原I遺跡、(27)、蛭田坪遺跡、(21)、富安I遺跡、(22)、津井切遺跡などから当該時期の遺構や遺物が確認されている。

【古墳時代】古墳時代の集落については、東郷遺跡の北に位置する7、土生A遺跡では古墳時代初めとみられる土師器が採集されているほか、東郷遺跡、富安I遺跡、津井切遺跡、小松原II遺跡、蛭田坪遺跡などで竪穴建物跡が確認されている。古墳時代後期になると道成寺の北に位置する1、箱谷古墳群では、横穴式石室を埋葬主体とする円墳である3号墳(円墳)に鉄製鍛冶具や鉄鐸といった渡来系文物が副葬され、また、15、吹上古墳群が築かれる。御坊市側では道成寺西に位置する(20)、八幡山古墳群や竪穴式石室・横穴式石室を埋葬主体とする(19)、亀山古墳群が築かれている。古墳以外では、東郷遺跡の東に位置する9、法徳寺遺跡で古墳時代とみられる滑石製の祭祀遺物などが出土している。

【古代】道成寺は大宝元年(701年)の創建と伝えられており、出土した瓦からも創建は白鳳時代に遡ると考えられ、現在まで続く日高地方の古刹である。古代の日高郡衙は御坊市堅田に所在する堅田遺跡から現在のJR御坊駅周辺にある(24)、小松原II遺跡に移動したことが発掘調査の成果から明らかとなっている。また小松原II遺跡から道成寺創建瓦と同瓦や古代瓦が出土している



図1 東郷遺跡周辺の遺跡

※番号は和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図による

和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図 (<https://wakayamaken.geocloud.jp/mp/4>)

【日高川町】

1. 箱谷古墳群 2. 箱谷遺跡 3. 艾谷遺跡 4. 道成寺遺跡 5. 鐘巻銅鐸出土地 6. 船田火葬墳墓 7. 土生A遺跡 8. 土生B遺跡 9. 法徳寺遺跡 10. 小熊遺跡 15. 吹上古墳群 38. 菩原城跡 41. 東郷遺跡 42. 土生城跡
【御坊市】

(10). 阪東丘古墳群 (11). 富安Ⅰ窓跡 (12). 富安岡遺跡 (13). 凤生寺山塙墓 (14). 凤生寺山古墳群 (15). 亀山銅鐸出土地 (16). 朝日谷遺跡 (17). 亀山遺跡 (18). 亀山城跡 (19). 亀山古墳群 (20). 八幡山古墳群 (21). 富安Ⅰ遺跡 (22). 津井切遺跡 (23). 小松原Ⅰ遺跡 (24). 小松原Ⅱ遺跡 (25). 湯川氏館跡 (27). 蛭田坪遺跡 (29). 東郷遺跡 (30). 海士王子跡 (31). 愛徳山王子跡 (32). 丸山古墳出土地 (78). 八幡山城跡 (81). 富安城跡

【史跡】

(214) 亀山城跡【県指定史跡】
(216) 熊野参詣道【国指定史跡】、(243) 道成寺境内【国指定史跡】

ことから、この場所に道成寺とほぼ同時期に古代寺院が存在しており、それが『日本国現報善惡靈異記』下巻第三十三縁に記載がある「別寺」の可能性が指摘されている。

【中世以降】 室町時代南北朝期に築かれたと伝えられる(78). 八幡山城跡のほか、室町幕府の奉公衆であり、周辺一帯で勢力をふるっていた湯河氏の築いた(25). 湯川氏館跡や(18). 亀山城跡などが周囲に展開している。

第2節 既往の調査（図2）

東郷遺跡は御坊市と旧川辺町の境界付近で工事中に甕や壺、高坏などの弥生土器が発見されたことで明らかとなった遺跡である。

昭和 55 年、御坊市水道事業所の北側で美浜町上水道水源地の建設工事に先立って御坊市より委託を受けた御坊市遺跡調査会が約 100 m²を発掘調査している。この調査では弥生時代後期の土坑や柱穴などが検出されており、弥生時代後期の土器や古墳時代の須恵器などが出土している。

その後、昭和 61 年度に市道駅前道成寺線の道路改良工事に伴って御坊市より委託を受けた御坊市遺跡調査会が発掘調査を実施している。この調査では 2,170 m²を調査しており、弥生時代中期から後期及び後期末から古墳時代前期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、溝、土坑などが検出されたほか、弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器などが出土している。特に古墳時代前期に削除されたとみられる大型の溝 SD-4 及び SD-25 は幅 6.0 ~ 7.0 m、深さ 1.8 ~ 2.4 m という大規模な灌漑用水路と考えられ、この溝より出土した土器の中には北部九州、中四国、尾張地方から搬入されたとみられる土器や格子叩きを持つ韓式系土器も出土している。

個人住宅建設に伴って平成 23 年度に御坊市教育委員会が実施した発掘調査が昭和 61 年度調査区の南隣接地で行われており、弥生時代中期から後期、古墳時代の竪穴建物跡や構などを検出し、弥生土器や土師器、須恵器などが出土している。

これらの既往調査成果から、東郷遺跡においては弥生時代中期から人々の活動が認められており、特に古墳時代初頭においては他地域との活発な人的・物的な交流が行われていたことが明らかとなった。また、東郷遺跡における弥生時代から古墳時代前期の居住域は遺跡中央から南を中心として展開すると推定される。

【参考文献】

- 川辺町『川辺町誌 第 1 卷 通史編上』1988 年
- 御坊市『御坊市史 第 3 卷 史料編』1981 年
- 御坊市遺跡調査会『埋蔵文化財発掘調査概報』1981 年
- 御坊市遺跡調査会『東郷遺跡 埋蔵文化財調査報告第 3 集』1987 年
- 御坊市教育委員会『御坊市埋蔵文化財調査年報－平成 24 年度－』2013 年



図 2 既往調査位置図 (日高川町及び御坊市提供地図に加筆)

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

調査は、和歌山県により江川小松原線通学路緊急対策事業が計画され、事業予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である「東郷遺跡」内に位置していたことに起因する。令和4年7月12日付け日建道第07120001号で和歌山県知事より、和歌山県教育委員会（以下、県教育委員会という。）へ文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が行われ、これに対し令和4年7月20日付け文第04010017号の25で確認調査を必要とする旨の通知を県教育委員会が行った。その後、令和4年9月7日付け日建道第09070001号で和歌山県知事より確認調査の実施について依頼がなされ、県教育委員会は令和4年9月14日付け文第09120001号でこれを受諾し、江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う東郷遺跡確認調査を実施した。現地調査は令和4年10月20日、21日の2日間で、合計5トレンチ約29m²の範囲で行われた。

その結果、県教育委員会により事業予定地については記録保存目的の本発掘調査が必要と判断され、和歌山県知事より県教育委員会へ発掘調査の実施について依頼があった。これを受けて公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、当センターという。）に県教育委員会より令和4年10月31日付け文第10280001号で実施計画書提出の依頼があり、令和4年11月7日付け和文セ第216号でこれを提出した。

これにより、令和4年11月8日付け文第10280001号の2で当センターへ県教育委員会より和歌山県と委託契約を締結するよう依頼があり、令和4年11月10日付けで和歌山県と当センターとで「江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う東郷遺跡発掘調査業務」の契約を締結した。現地調査の契約期間は当初令和5年3月31日までであったが、江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う仮舗装や電柱移設等の作業のため、令和5年4月28日まで延長した。

第2節 発掘調査

1. 発掘調査

契約後、当センターにおいて令和4年11月11日付け和文セ第217号で文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届出書を和歌山県地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第55条第1項及び県教育委員会の事務処理の特例に関する条例第2条に基づき、日高川町教育委員会を経由して、県教育委員会に提出した。

発掘調査にあたって必要となる建設機械と作業員は、和歌山県より建設工事を請け負った株式会社坂本組から提供を受けた。

発掘調査は、令和4年12月5日から令和5年4月11日まで、一時仮舗装や電柱の移設のための休止期間を挟んで実施した。調査地は、昭和61年度に御坊市の市道駅前道成寺線の道路改良工事に伴う発掘調査が行われた地点から北に約200mの地点にあたる。調査面積は372.0m²である。

県教育委員会による確認調査の成果から、現在の水田耕作土・床土を機械掘削、それ以下を人力掘削とした。調査により確認した遺構面1面で、遺構の平面実測図・断面実測図及び土層断面図等

を作成した。調査地区隣接地を排土置き場として使用し、道路を挟んで南側を1区、北側を2区として各区ごとに調査を実施した。江川小松原線通学路緊急対策事業の工事工程上、発掘調査後の埋戻し作業は実施せず、令和5年4月11日に現地調査を終了した。

2. 現地公開

調査期間中の令和5年4月10日には、調査成果を県民に見ていただくため、現地公開を実施した。現地公開には近隣住民を中心に42名に参加していただいた。



遺構掘削



現地公開

第3節 出土遺物等整理業務

1. 出土遺物応急整理

出土遺物については、時期決定を行い、調査方法の判断資料とするため当センター事務局整理棟において応急的な洗浄作業を実施し、出土遺物台帳の作成作業を実施した。また、現場で撮影した中判デジタルカメラ及び35mmフルサイズデジタルカメラのRAWデータはリネーム後、適切なデジタル現像を行い、TIFFデータに書き出して保管した。現地調査の遺構等の記録図面は、地区別・図面種別などの区分を行い図面ファイルに収め、応急的な整理を実施した。

2. 出土遺物等整理業務

発掘調査で出土した遺物の整理及び調査報告書の作成について、令和5年度に出土遺物整理業務を「江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う東郷跡遺出土遺物整理業務」として和歌山県より受託した。契約期間は令和5年4月28日から令和6年1月31日である。

出土遺物整理業務は発掘調査で出土した遺物全点を対象に行った。遺物の登録・注記・接合・補強・実測等の一連の作業を行うとともに遺物観察表の作成、現地で記録した遺構実測図等の整理を行い、遺物実測図の作成と共にデジタルトレース作業を実施し、これらを組版して図面原稿を作成した。また、現場で撮影した遺構写真等について整理を実施し、遺物写真を撮影するとともに主要な遺構写真とともに組版を行い、写真図版を作成した。これら一連の作業を踏まえて原稿執筆を行った。

業務は令和5年5月から実施し、令和6年1月に本書を刊行するに至った。

第3章 調査方法

第1節 地区割（図3）

調査区の地区割は、平面直角座標系（平成14年度国土交通省告示第9号）第VI系（世界測地系）を使用し、遺跡を網羅する北東に基点（X = -231,000 m、Y = -75,000 m）を設け、その点から西及び南にむかって大区画・小区画を設けて区割を行った。大区画は基点をA 1 地点と定めて、西方向へ100 mごとにB、C、D…、南方向に2、3、4…という軸を設定した1辺100 m四方の区画で、北東隅の地区名を用いてA 1、C 3などと呼称する。大区画の北東隅をa 1 地点として、そこから4 mずつ西方向へb ~ y、南方向へ2 ~ 25とそれぞれの方向に25分割し、一辺4 mの正方形区画を小区画とする。小区画は北東隅の地区名からa 1 区～y 25 区と呼称する。地区名は、大区画・小区画（A 1～a 1 区など）で表す。今回の調査区は、大区画で1、2区ともにJ 4 の範囲内に、小区画ではb 6～s 11 の範囲内に位置する。

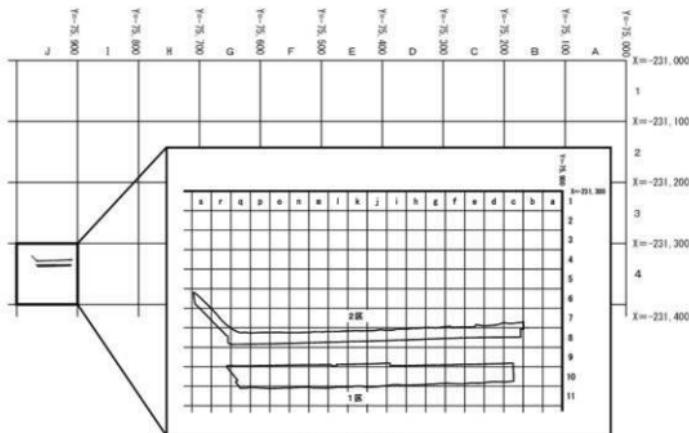


図3 地区割図

第2節 調査現場の記録作業等

発掘調査は、遺物包含層より上を建設機械による掘削で、遺物包含層以下を人力掘削で進めた。また、状況に応じ、下層確認トレンチを設定し、遺構面以下の土層堆積状況を確認した。

記録は、写真撮影と実測図面作成を行った。写真撮影については、中判デジタルカメラ及び35mmフルサイズデジタルカメラを使用し、デジタル画像データ（RAWデータ及びJPEGデータ）には全てファイル毎に撮影内容を記載して保存している。記録図面は、縮尺1:20の遺構実測図（遺構平面図・断面土層図）及び遺構位置全体図を作成したほか、1区・2区とも調査地区的北・南壁土層断面図及び必要に応じて各壁面の土層断面図などを記録として作成した。

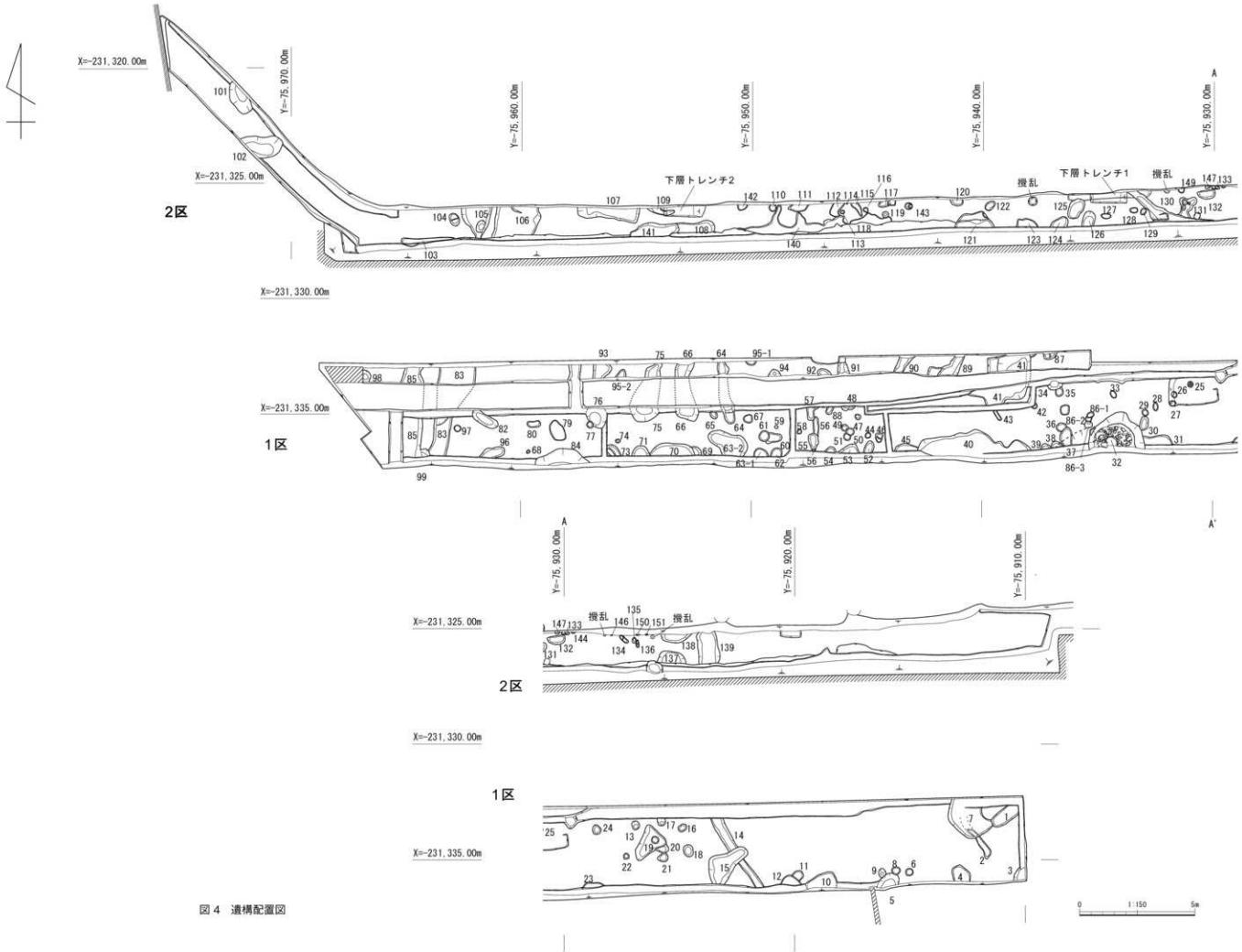


図 4 造構配置図

第4章 調査の成果

第1節 調査概要

1・2区を通じて土坑、溝、柱穴、小穴等の遺構を検出した。これらの遺構からは出土遺物が極めて少ないが、遺構面の上層にあたる遺物包含層から古代や中世の遺物が出土していることから、遺構面の年代は中世以前の可能性が高いと考える。遺構の埋土はいずれも基本層序第5層に近似するが、含有物に若干の差異が認められる。

検出した遺構の中には1・2区にまたがる同一遺構と考えられるものが含まれるため、1・2区を分けずに説明する。

第2節 基本層序（図5）

調査地における基本層序は、県教育委員会の確認調査の成果を参考に現地にて次のように大別した。

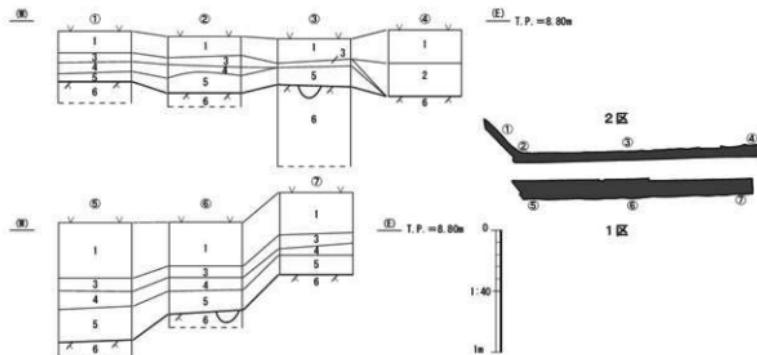


図5 基本層序

第1層：現代の水田耕作土及びその床土である。

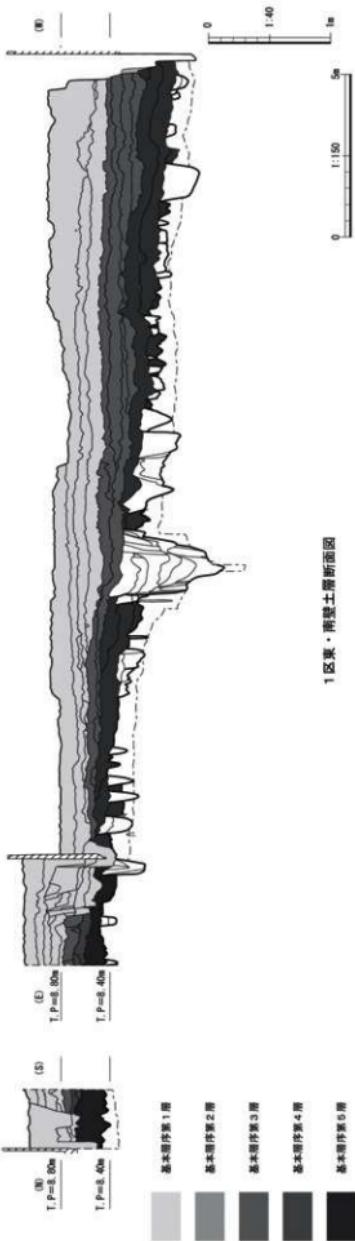
第2層：2区東端でのみ確認した土層で、旧耕作土もしくは耕作のために行われた整地層である。

第3層：黄褐色～にぶい褐色のシルトを含む砂層で、弥生時代末から中世の遺物を含む。中世とみられる遺物が多く、中世以降に形成された土層とみられ、旧耕作土と考える。2区東端部など一部を除き調査区のほぼ全域で確認できる。

第4層：にぶい黄褐色のシルトを含む砂層で、弥生時代末から中世の遺物を含む。1区では比較的良好に遺存するが、2区では調査区中央部から東端部にかけ確認することができなかった。第3層と同じく中世以降に形成された旧耕作土と考える。

第5層：黒褐色のシルトを多く含み、やや粘質性の高い砂層である。古代から中世の遺物を含む遺物包含層である。含まれる遺物は第3層、第4層よりもやや少ないものの、遺存状態については比較的良好なものが確認できる。2区東端部以外の調査区全域で確認した。

1区東・南壁土層断面図



2区北壁土層断面図

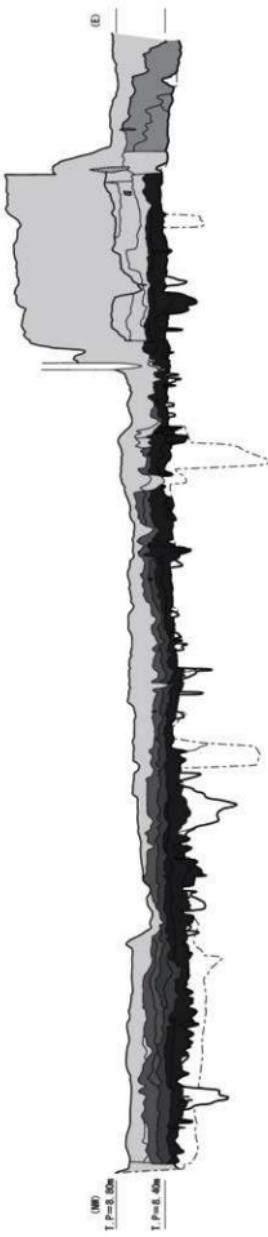


图 6 1·2区土層断面図

全体的に縮まりがなく、小礫を含み、その土質から調査地周囲が一時的に低地として滞水していた可能性を示す。

第6層：明褐色から黄褐色のシルトを含む砂層で無遺物層である。調査区周辺における基盤層と考えられ、円礫を多く含む土層とシルト質を多く含む土層に分層でき、2区では下層確認トレンチの土層堆積状況から、円礫を多く含む土層がシルト質を多く含む土層の下へもぐりこんでいく状況が確認できた。また調査区の西にいくにつれ、粗砂を多く含むようになる。この層の上面が遺構面である。

第3節 遺構と遺物

【土坑】

32 土坑（図7、写真図版1・2） 1区中央南壁付近で検出した土坑で、遺構の重複関係から31土坑より新しく、30土坑、37土坑、38土坑、86-3土坑、39土坑よりも古い。いずれの遺構からも遺物が出土していないため、遺構の詳細な年代については不明である。東西長3.80m、南北軸の検出長1.70m、平面形状はやや歪な楕円形で、一部は調査区外南へ続く。断面形状は緩やかな逆三角形状で深さは0.86m。礫の多い地山下層まで掘り込まれている。

101 土坑（図7、写真図版2・3） 2区西端で検出した土坑で検出長軸1.44m、検出短軸は0.64m、平面形状は南北方向に延びる楕円形状とみられ、一部は調査区外北東に続く。断面形状はやや歪な船底形で深さ0.38mである。出土遺物はなかった。

102 土坑（図7、写真図版2・3） 2区西端で検出した土坑で検出長軸1.60m、短軸1.26m、平面形状は楕円形とみられ、一部は調査区外西へ続く。断面形状は船底形で深さは0.20mである。出土遺物はなかった。

121 土坑（図8、写真図版3） 2区ほぼ中央部の南壁付近で検出した土坑で、検出長軸1.72m、検出短軸0.68m、平面形状はやや歪な楕円形とみられ、一部は調査区外南へ続く。断面は北から南にかけて下がる形状で、深さは0.20mである。古墳時代及び中世の土師器が出土している。

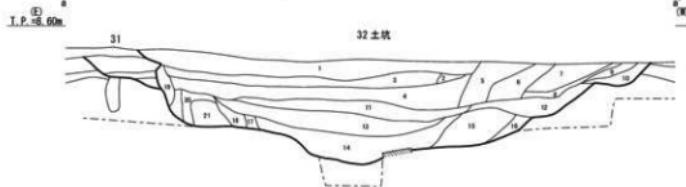
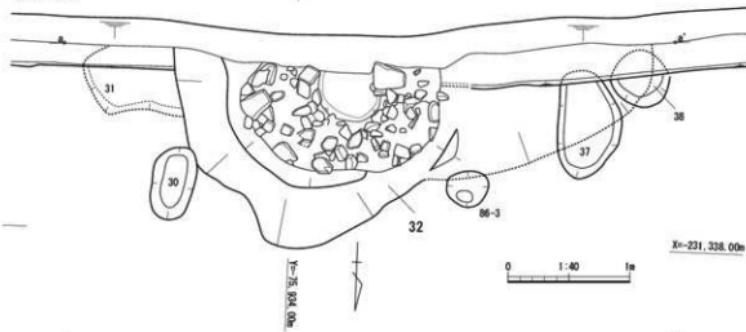
138 土坑（図8、写真図版4） 2区東部北壁付近で検出した土坑で、検出長軸1.36m、検出短軸0.40m、平面形状は楕円形とみられ、一部は調査区外北へ続く。断面形状はやや歪な船底形で深さ0.20mである。出土遺物はなかった。

【溝】

14（139）溝（図11、写真図版4・5） 1区東部の14溝と2区東部の139溝は同一遺構の可能性が高いと考える。14溝の検出長は3.60m、幅0.30～0.50m、断面形状は浅い船底形、139溝の検出長は1.20m、幅0.88～0.92m、断面形状は歪な台形状で深さ0.46mである。両者が同一遺構とすると南北方向に12.00m以上延びる溝と考えられる。出土遺物はなかった。

83（106）溝（図11、写真図版6・7） 1区西部の83溝と2区西部の106溝は同一遺構の可能性が高いと考える。83溝の検出長は1区北部で0.78m、南側で1.64m、幅0.58～1.56mと北に向けて幅が広がる。深さは0.05mと浅い。106溝は検出長1.30m、幅1.74～1.82m、深さ0.18mである。両者が同一遺構とすると南北方向に11.40m以上延びる溝と考えられる。出土遺物はなかった。

【32 土坑】



【32 土坑】

- 1 10YR2/2 黒褐色粘質シルト混細砂
- 2 10YR2/1 黒褐色粘質シルト・混細砂・まりゆるい
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混細砂・やわらかい
- 4 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混細砂・硬性強
- 5 10YR5/4 にぶい 黄褐色粘質シルト・混細砂・マンガン含
- 6 10YR5/4 にぶい 黄褐色シルト・混細砂・マンガン・鉄分含
- 7 10YR5/3 にぶい 黄褐色シルト・混細砂・マンガン・含
- 8 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混粘質シルト
- 9 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混細砂
- 10 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混粗砂
- 11 10YR5/4 塗褐色粘質シルト

- 12 10YR3/2 黒褐色粘質シルト・混細砂・粘性やや強
- 13 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混細砂・まりゆるい
- 14 10YR2/2 黒褐色粘質シルト・混細砂・まろやか
- 15 2.5Y5/2 墓塚黄褐色粘質シルト・混細砂
- 16 10YR5/4 にぶい 黄褐色粘質シルト・混細砂 鉄分含
- 17 10YR3/2 塗褐色粘質シルト・混細砂
- 18 10YR5/3 にぶい 黄褐色粘質シルト・混細砂 マンソン・地山ブロック含
- 19 10YR4/2 墓塚黄褐色粘質シルト・混細砂
- 20 10YR4/2 墓塚黄褐色粘質シルト・混細砂 (地山ブロック)
- 21 10YR3/2 黑褐色粘質シルト・混細砂

【101 土坑】



【102 土坑】

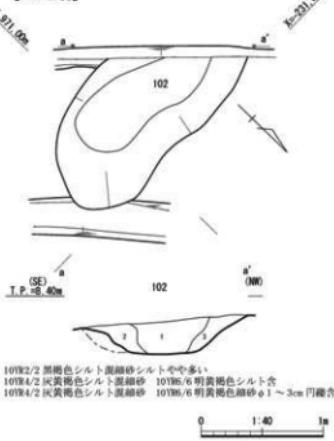


図 7 土坑実測図 1

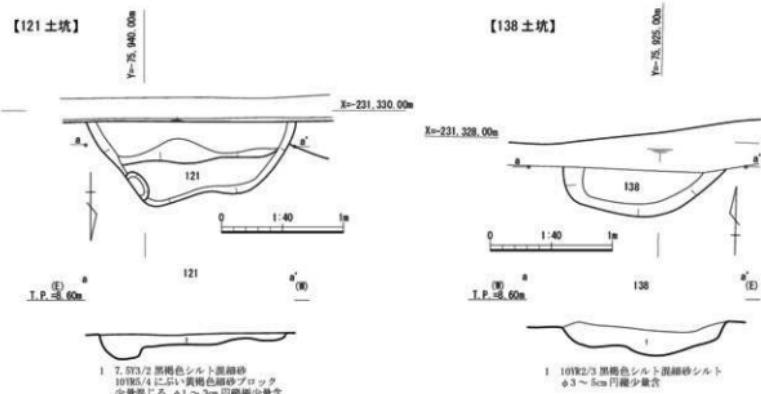


図 8 土坑実測図 2

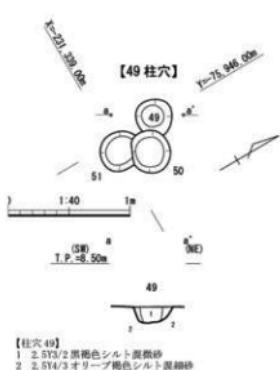


図 9 柱穴実測図

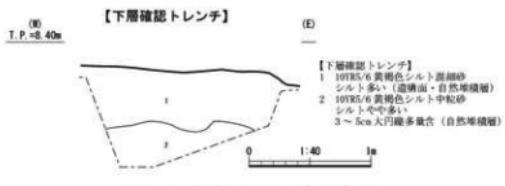


図 10 下層確認トレンチ土層断面図

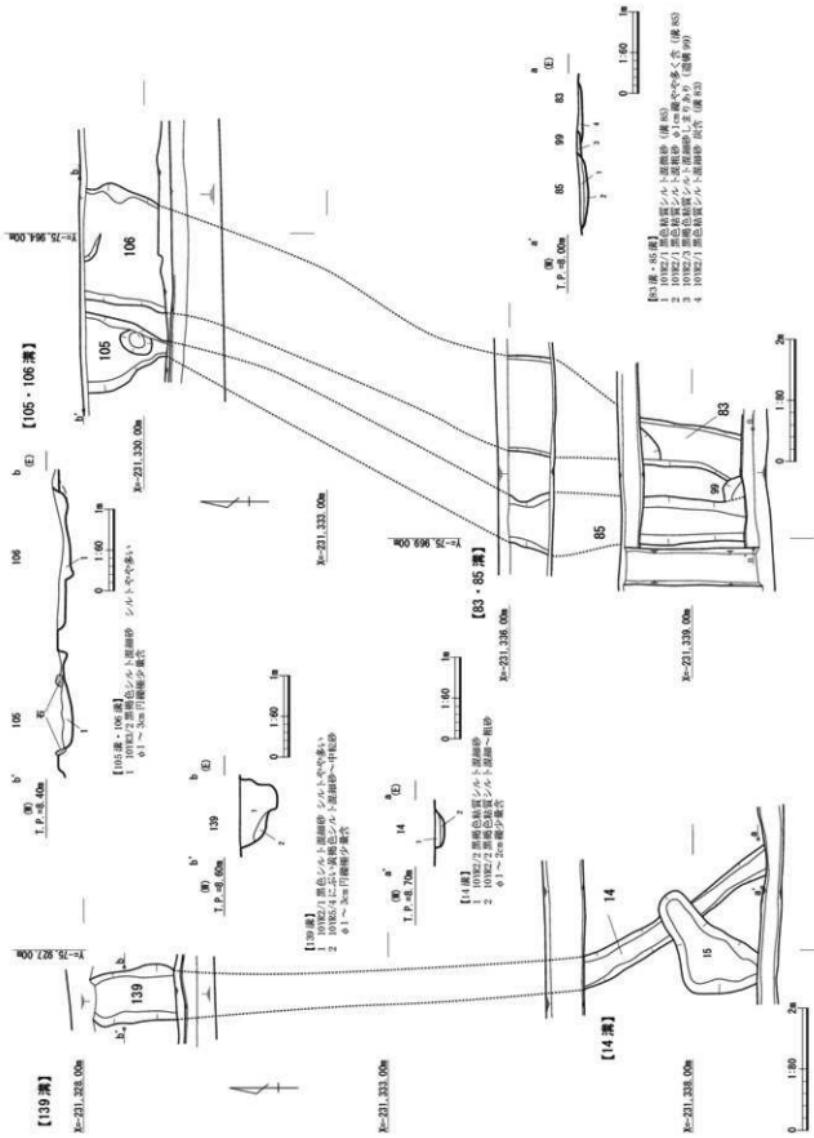
85 (105) 溝 (図 11、写真図版 6・7) 前述の 83 (106) 溝の西に隣接する溝で、1 区西部の 85 溝と 2 区西部で検出した 105 溝は同一遺構の可能性が高いと考える。85 溝の検出長は 1 区北部で 0.71 m、南部で 1.60 m、幅は 0.63 ~ 0.80 m、深さは 0.10 m である。105 の溝は検出長 1.34 m、幅 0.14 ~ 1.34 m で北に向かって幅が広がる。深さは 0.14 m である。両者が同一遺構とすると南北方向に 11.80 m 以上延びる溝と考えられる。出土遺物はなかった。

【柱穴・小穴】

49 柱穴 (図 9、写真図版 7) 1 区中央部で検出した柱穴で、遺構の前後関係から小穴 50 よりも古い。径 0.52 ~ 0.56 m、深さ 0.12 m で土層断面の観察から柱根跡が確認できるが、調査区が狭小で他に柱穴を確認できていないことから、建物等に伴う柱穴かどうかは不明である。出土遺物はなかった。

【下層確認トレンチ】 (図 10、写真図版 7)

2 区において遺構面以下の土層堆積を確認するためにトレンチを設定し、掘削した。その結果、遺構面である黄褐色のシルトをベースとした地山と更にその下層に円礫を多く含む土層を確認した。



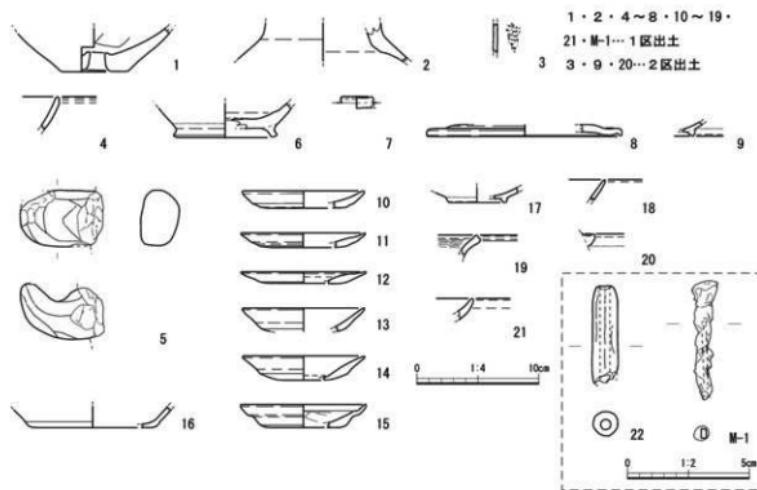


図 12 出土遺物

32 土坑においても円碟を多く含む土層を確認しており、東郷遺跡北東部において、遺構面下に同様の土層堆積があることが確認できた。

【出土遺物】(図 12、写真図版 8・9)

弥生時代中期の弥生土器壺（1）は底部に焼成前穿孔が確認できる有孔壺とみられ、外面に黒斑が残る。弥生土器壺（2）は摩滅により調整不明瞭で肩上部と思われるが、詳細な時期については不明である。弥生時代末から古墳時代初頭の土師器の甕もしくは鉢とみられる（3）は外面にタタキが残る。古代の土師器壺（4）、鍋もしくは鉢の把手（5）はいずれも摩滅により調整不明瞭で詳細な時期については不明である。

古代の須恵器壺（6）は貼り付け高台である。須恵器壺蓋（7・8）はいずれも奈良時代後半とみられる。古代の黒色土器（9）は内黒焼成の黒色土器Aの椀底部とみられ、小さな高台が貼り付けられていることから 11世紀後半と考える。

中世の土師器は小皿（10～15）と皿（16）に分類できる。10～12は器高が低く、口縁端部がわずかに内湾する 10・11 と外反する 12 に分類できる。13～15はやや器高が高く、体部から底部にかけて器壁が厚い。15 は口縁部が「ての字状口縁」の形状を呈しており、中世前半の土師器皿と考えるが、胎土・焼成が精緻であることから近世の可能性も残る。瓦器は椀（17・18）があり、17 は摩滅のため調整は不明瞭だが、貼り付け高台で高台断面は小さな逆三角形形状を呈する。18 は椀の口縁部で、端部が直立するとみられる。中世の土師器（19・20）は鍋もしくは釜とみられる。国内産陶器の皿もしくは碗（21）は口縁部内外面に灰釉がみられ、唐津焼である可能性が高い。土製品として管状土錘（22）、金属器は釘（M-1）がある。釘は断面が方形で和釘とみられるが、時期は不明である。

第5章　まとめ

第1章でも述べたが、東郷遺跡は弥生時代から古墳時代の集落跡として知られる遺跡であり、既往調査では古代の遺構・遺物も確認されている。今回の東郷遺跡の発掘調査では1・2区を通して溝、土坑、柱穴、小穴等の遺構を検出した。これらの遺構からの出土遺物は極めて少ないが、遺構面の上層にあたる遺物包含層から中世の遺物が出土していることから、遺構の年代は鎌倉時代から室町時代以前の可能性が高いと考える。遺構の埋土はいずれも基本層序第5層に近似するが、含有物に基本層序第6層（地山層）のブロック土や小砾を含むなど、若干の差異が認められる。

これまでの既往調査の成果から、弥生時代から古代にかけての集落の中心は遺跡の中央部に展開するものと考えられる。既往調査で確認した時期と断定できる遺構は、今回調査区では確認できなかつたため、弥生時代から古代にかけて、遺跡北東端周辺では、人々の活動は活発ではなかつたと推定できる。

一方、中世の遺構と考えられる32土坑や101土坑などのように遺存状況のよい遺構が複数確認できたことから、今回の調査区が位置する遺跡北東端は中世になり人々の活動が活発化したと考えられる。しかし、掘立柱建物等、集落等に直接関係する遺構は確認できなかつたため、中世における遺跡の中心地については調査区よりも西もしくは南側に展開する可能性が高い。

また、今回の調査区で検出した溝のうち、調査区東部で検出した14（139）溝は、ほぼ同じ標高の遺構面に掘り込まれるもの、2区で検出した139溝の方が1区の14溝よりも掘削深度が深い。調査区周囲は北に低丘陵があり、日高川が流れる南に向かって緩やかに下がる状況であること、14（139）溝を検出した東側では検出した遺構数が激減すること、調査区北壁の土層断面の観察から遺物包含層が確認できなくなるなどの特徴があり、これらを踏まえると、14（139）溝は何らかの区画溝や排水用水路であった可能性が指摘できる。

表2 出土遺物觀察表（土器・土製品）

表(二)は復元数据											
報告者番号	実機番号	登録番号	地区	遺構部位	種類	基盤	法寸(cm)	底面形状	底径	高さ(cm)	備考
1	16	41	第1区 J1-g9-10	第1層中	陶土器	直底	13.0	深底	5.5	20.0	内側、陶土器よりよこチカラ、底面に横溝が残ります。外側に内側よりも高く、底面の内側を多く残す。
2	17	41	第1区 J1-g9-10	第1層中	陶土器	直底	32.0	32.0	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、外側に内側よりも高く、底面の内側を多く残す。
3	21	60	第2区 J2-g9-10	121 土壁	土器	甕	22.0	26.15	15.0	20.0	内面にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
4	13	38	第1区 J1-g9-10	第1層中	土器	甕	22.0	26.15	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
5	6	11	第1区 J1-g9-10	第1層	土器	甕	32.0	42.0	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
6	14	34	第1区 J1-g9-10	第1層中	陶器	直底	22.0	26.0	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
7	19	43	第1区 J1-g9-10	第1層中	陶器	直底	26.0	31.0	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
8	8	14	第1区 J1-g9-10	第1層中	陶器	直底	35.0	35.0	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
9	23	39	第2区 J2-g9-10	土壁	陶土器	直底	22.0	26.15	15.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
10	6	12	第1区 J1-g9-10	第1層中	土器	小底	30.0	38.0	18.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
11	9	16	第1区 J1-g9-10	第2層中	土器	小底	30.0	32.0	12.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
12	10	17	第1区 J1-g9-10	第4層中	土器	小底	30.0	30.0	10.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
13	20	31	第1区 J1-g9-10	4.1.1 第2層中 J2-g9-10	土器	小底	26.0	26.0	10.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
14	15	29	第1区 J1-g9-10	第4層中	土器	小底	30.0	25.0	10.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
15	7	13	第1区 J1-g9-10	第5層中	土器	小底	30.0	38.0	18.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
16	12	36	第1区 J1-g9-10	第1層中	土器	直底	34.0	30.0	9.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
17	16	32	第1区 J1-g9-10	第5層中	陶器	直底	32.0	45.0	20.0	20.0	内側にヨコチカラ、底面により内側の調整が明確
18	5	32	第1区 J1-g9-10	第1層中	高足	脚	17.0	19.0	10.0	20.0	L脚部から小底にヨコチカラで内側にヨコチカラで内側を多く残す。
19	1	8	第1区 J1-g9-10	第1層	土器	直底	32.0	32.0	15.0	20.0	L脚部内側にヨコチカラ
20	22	54	第2区 J2-g9-10 -2層中	陶器	直底	30.0	30.0	10.0	20.0	内側にヨコチカラ	
22	3	11	第1区 J1-g9-10	陶器	高足	脚	18.0	19.0	10.0	20.0	L脚部内側にヨコチカラ
22	21	54	第2区 J2-g9-10 -2層中	土器	直底	30.0	45.0	10.0	20.0	内側にヨコチカラ	

表3 出土遺物觀察表（金属製品）

※・は復元データ (復元数値が不明)											
報告者番号	実機番号	登録番号	地区	遺構部位	種類	基盤	法寸(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量 g	備考
M4	2	9	第1区 J1-g9-10	第1層中	鉄製品	板	49.0	94.0	0.6	9.0	板面不規則



1 1区調査前（東から）



2 2区調査前(北西から)



3 32 土坑土層断面
(北から)



1 32 土坑周辺実掘状況
(南西から)



2 101 土坑土層断面
(西から)



3 102 土坑土層断面
(東から)



1 101・102 土坑完掘
状況（北から）



2 121 土坑土層断面
(北から)



3 121 土坑完掘状況
(北西から)



1 138 土坑土層断面
(南西から)



2 138 土坑完掘状況
(西から)



3 14 溝土層断面
(南から)



1 14 溝完掘状況
(南から)



2 139 溝土層断面
(南から)



3 139 溝完掘状況
(西から)



1 83・85 溝土層断面
(北から)



2 105 溝土層断面
(南から)



3 106 溝土層断面
(南西から)



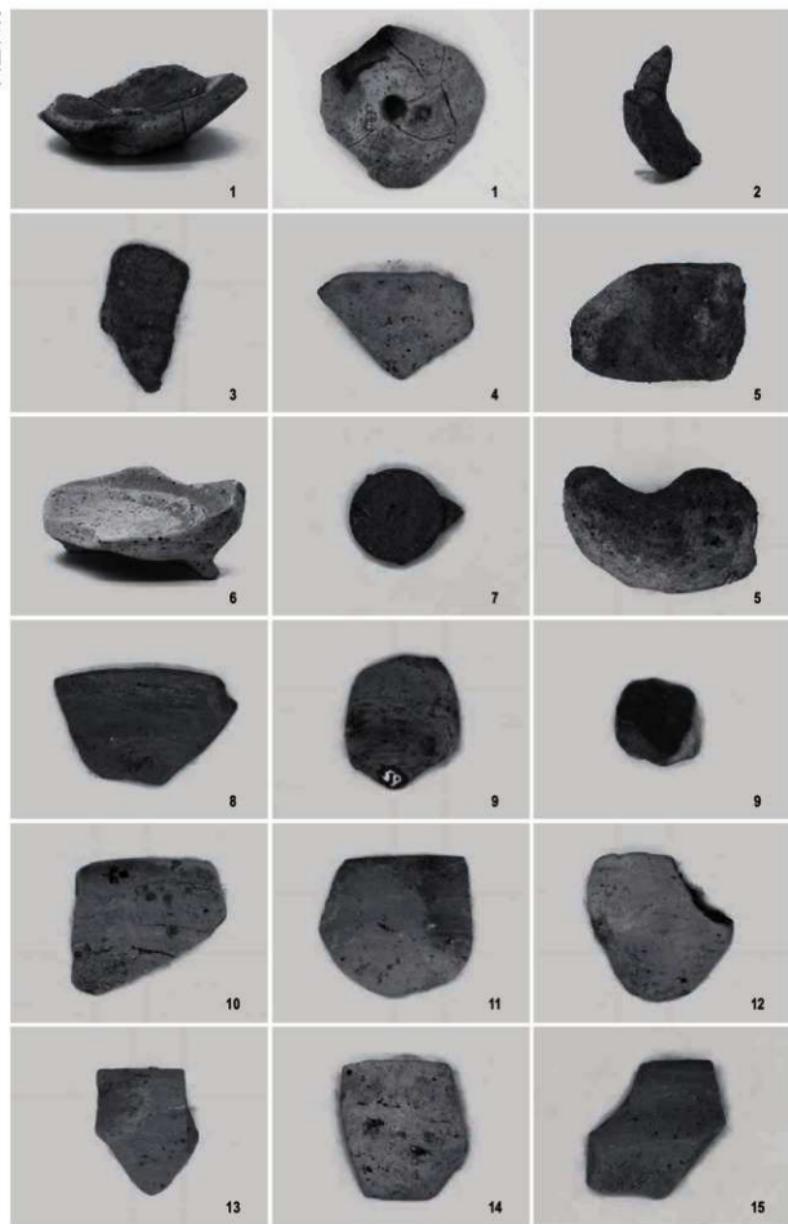
1 105・106 溝完掘状況
(北西から)



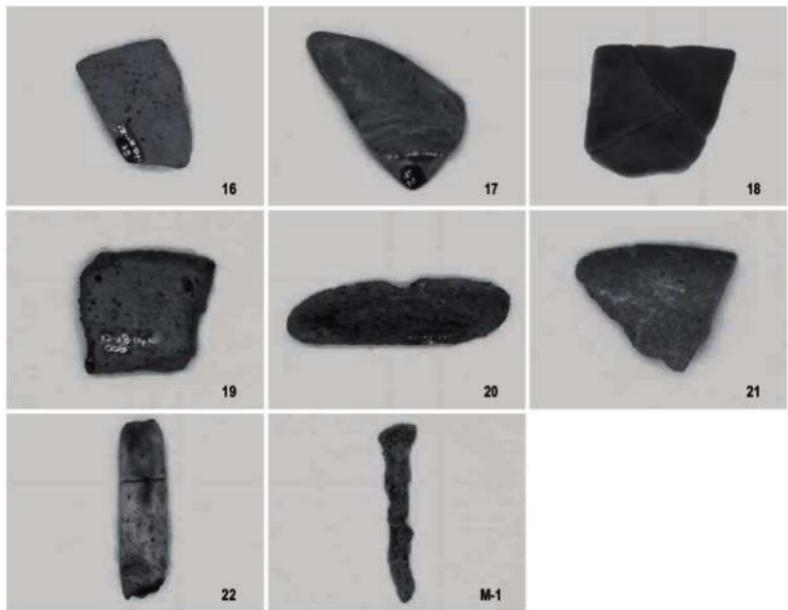
2 49 柱穴土層断面
(北西から)



3 2区下層確認トレーンチ
土層断面 (南西から)



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	とうごういせき							
書名	東郷遺跡							
副書名	江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う発掘調査報告書							
巻次	——							
シリーズ名	——							
シリーズ番号	——							
編著者名	田之上裕子、濱崎範子							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1 TEL 073 - 472 - 3710							
発行年月日	西暦 2024 年 1 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
東郷遺跡	和歌山県 日高郡日高川町土生 地内	303925	041	33° 54' 42.34"	135° 10' 43.02"	2022.12.05 ～ 2023.04.11	372.0	江川小松原線 通学路緊急 対策事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東郷遺跡	集落跡	古代～ 中世	土坑、溝、柱穴、 小穴	土師器・須恵器・黒色土器・ 瓦器・陶磁器	集落等の区画溝の可能 性がある溝を検出した。			
要約	東郷遺跡は弥生時代の集落跡として知られる遺跡であるが、今回の調査では当該時期の遺構は確 認できなかった。一方で中世以前と考えられる土坑や溝、柱穴などを多数検出しており、周間に集 落があった可能性がある。また、南北に延びる溝を検出しており、溝の東側では遺構数が極端に少 なくなることから、集落の区画溝等の可能性が考えられる。							

東郷遺跡

—江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2024 年 1 月 31 日

編集・発行：公益財団法人 和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1

印刷・製本：株式会社 協和
和歌山県海南市南赤坂 5-3